

唐詩の中の建築用語に関する研究

—古典和歌と比較して—

ARCHITECTURAL TERMS IN POETRY WRITTEN
DURING CHINA'S DANG DYNASTY

Compare with Japanese poetry in Japan's middle dynasty

張 奕文*, 若山 滋**, 松本直司***

Yiwen ZHANG, Shigeru WAKAYAMA and Naoji MATSUMOTO

Architectural terms in China's Dang Dynasty (618-907) poetry was analyzed and then compared with the Japanese poetry written during Japan's Middle Dynasty (629-1200). All architectural terms were analyzed in the context of poems. We analyze: (1) the variety of architecture and architectural terms in the Chinese poems; (2) the priority of outside space in the poems; (3) the meaning of 'gate' in Chinese poems; (4) the emotions of Chinese poets with respect to their home country; (5) the 'road' and 'castle' in the sense of outside space in Chinese poems; (6) the 'vehicle' and 'boat' in the sense of dynamic space in the poems; (7) the differences in expression between the Chinese and Japanese traditions.

Keywords: literature, architectural term, aesthetic consciousness

文学, 建築用語, 美意識

1. 研究の意義と目的

日本の古代文化が大陸の、特に唐王朝の影響を強く受けていることはよく知られている。仏教建築も漢字も中国から渡ってきたもので、ある意味で建築も文学も大陸との関係を抜きにしては論じられない。筆者らは、これまで古代、中世の日本文学に登場する都市と建築空間について研究してきた立場から、特に言語が指し示す建築空間の深層の意味とその背景としての文化的脈絡を考察する上で、同時代の中国文学を研究する必要があると考えてきた。

本研究では、中国文化史上、一つの頂点に達し、日本文化にも大きな影響を及ぼした唐の時代(618-907年)の、中国文学の精華というべく詩作品をとりあげ、そこに現れる、都市と建築を示す用語を分析するとともに、既に発表されている「『万葉集』における建築空間」^{文1)}、「『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空

間」^{文2)}及び『文学の中の都市と建築』^{文15)}との比較論的な考察を行うことによって、日本文学と建築との関係を考える一助とする。文学の中に登場する都市と建築は、作者の個人的な心象空間ではあるが、それがその時代の文化様式から生まれ、不特定の読者に共通する感性、意識、思想のベースを想定して言語化されていると考えれば、それはその文化の内部において普遍的な意味を獲得しているものと思われる^{注1)}。

2. 研究対象とその時代背景

唐代の300年間に世に出た詩人の数は2800人余り、詩作の総数は50000首を超えるとされる。これらを通読して理解するのは文学の専門家にとってもけっして容易ではない。本研究では、唐の詩歌文学の中で代表的な地位と普遍的な意味を獲得しているものとして、岩波書店の『唐詩選』^{文1)}を基本とし、筑摩書房の『唐詩選』^{文2)}、

* 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・工修

** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

*** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

角川書店の『唐詩三百首』^{文3)}を加えて直接の分析資料とする。岩波書店の『唐詩選』は、中国でも日本でも唐詩の入門書として広く使われている16世紀の明の時代の李攀龍(1514~1570)の編集による『唐詩選』465首^{注2)}を底本とし、多くの諸選集を参照に清代に編集された『全唐詩』などと校合し^{注3)}、注釈を加えたものである。筑摩書房の『唐詩選』は、李攀龍の『唐詩選』の偏狭^{注4)}を補足するため、清代の初期17世紀に徐倬の編んだ初盛中晩の四時期にわたり、同じ密度で収録する『全唐詩録』を底本とし、李攀龍の枠を破ろうとして444首を選び^{注5)}、注釈を加えたものである。角川書店の『唐詩三百首』は、刊行より現在に至る200年あまり、知識人の教養として古典文学の教育を受けるものの必読書である『唐詩三百首』^{注6)}をテキストとし^{注7)}、その中から93首^{注8)}を選び、注釈と観賞を加えたものである。

本研究においては、できるだけ客観的に唐詩の全体像をとらえるべく、以上三つの詩選を合わせて、172人の882首の詩作^{注9)}を直接の分析対象とする。『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』に関しては既に発表論文で述べている^{注10)}。

3. 既往の研究

日本古代文学に登場する都市や建築に関する研究としては、木村徳国氏の『記・紀・万葉』の中の建築用語の研究^{注11)}があり、「家」「やど」「殿」「宮」など建物全体を表す用語に限って、その意味と具体的内容について考察し、成果をあげている。特にイヘ非建造物説^{注12)}は注目すべき卓見であった。『源氏物語』に関しては、池浩三氏が寝殿造建築の史実との対応関係を研究している^{注13)}。古代から中世にかけての居住空間の文化的側面に関しては小野恭平氏の研究^{注14)}があり、この時代の日本の居住美学の成立を論じている。国文学の分野では中小路駿逸氏の研究^{注15)}が注目される。

古典文学の中の都市と建築空間の変遷に関しては、筆者らはこれまで、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』『源氏物語』『枕草子』の中に登場する都市と建築に関わる用語をすべて抽出することを基本に、文学をできるだけデータ化する方針によって、その用語が示す空間の性質、文脈との関係、作者の空間評価、文学の空間構造などについての研究を続けている^{注16)}。これらをまとめたものとして、『文学の中の都市と建築』^{文15)}が出版されている。

唐詩については、中国でも日本でも古来から多くの研究があるが、それらはすべて純粋に文学史的研究である。本論は、建築学の分野において、文学的な資料の中の都市と建築を現実の空間と切り離したそれ自身の世界として扱おうとするもので、史実との関係よりも文学における空間の意味の構造に重点を置いている。

4. 研究方法

研究方法としては、資料とした唐詩の中から、都市と建築空間を指す語を「建築用語」と定義して抽出する。ここで建築用語は、都市や庭の自然、人工的な外部施設なども含め、その指示する空間により、建物、部屋、部位、部材・建具、家具・用具^{注17)}、庭、派生語、国、都市・村、外部施設、その他に分類して集計する。

以下にその分類と具体例を示す。

建物	建物全体、一棟あるいは複数の棟（家、楼、宮、関、臺、閣など）
部屋	建物内部の一つの空間的な部分（堂、室、房、閨など）
部位	建築を構成する位置の概念を伴う物質的な部分（壁、軒、屋根、窓、門など）
部材・建具	建築を構成する部品の部材、部屋の仕切り（柱、梁、欄干、戸など）
家具・用具	室内調度品、生活用具、楽器（屏風、牀、席、笛など）
庭	庭全体及びその構成物（園、庭、池、花、苑など）
派生語	建築の言葉で建築ではないものを表す用語（宿、居、棲、住など）
国	国、地方（漢、国、楚、唐、日本など）
都市・村	都市、農村（長安、城、都、村など）
外部施設	外部空間を形成する人工構築物（道、橋、津等）
その他	生活空間に近いものを表す上記に含まれない用語（車、船、書等）

次に詩作の中に現われる都市と建築空間を表す語の文脈上の意味内容及びそれにかかわる情感表現を調べ、その空間美意識を分析し、さらに古典和歌の三作品の中の建築空間との比較を行う。

5. 建築用語について

882首の唐詩の中から抽出される建築用語は569種4048語と極めて多く、ここですべての建築用語を掲載することは不可能であるが、各分類における頻度の高い建築用語を表1に掲載する。表2に見る如く、和歌では「家」「やど」「宮」「屋」「いほ」などの建築用語がほとんどであるが、唐詩では「家」「楼」「宮」「関」「臺」「塞」「殿」「亭」「寺」「宅」「堂」「門」「簾」「池」「宿」「棲」「城」など建築的語彙が極めて豊富である。唐の時代の都市的繁栄と建築の多様性及びそれに対応する言葉の多様性を示している^{注18)}。

表1を、唐詩の建築用語の分類別構成比を示す図1と合わせて見ると、[建物]が1198例で建築用語全体の30%を占め、圧倒的に多い。次に[庭]592例15%、[都市・村]573例14%となっている。内部空間を表す

〔部屋〕〔部材・建具〕〔家具・用具〕の用語はわずかしは見られない。この傾向は和歌でも同様であるが（図2）^{注19)}、和歌の場合、『万葉集』から『古今集』『新古今集』へ移るに従い、〔建物〕が減少し、〔部屋・部位〕〔庭〕が増加する傾向にある。

5-1. 〔建物〕について

唐詩全体の建築用語を通じて、「家」という語彙が167例で圧倒的に多く、これは『万葉集』と共通する。「家」は生活の拠点となる住居、あるいはそこから派生して家族・家系・人を意味するもので、ここではそこに住む人との関係が強く意識され、その内部よりも、外部から、多く詠まれている。例えば、

八月洞庭秋 瀟湘水北流 還家萬里夢 為客五更愁

（八月洞庭秋なり 瀟湘水北へ流る

家へ還る万里の夢 客と為る五更の愁い）文1）中、pp.146

家在夢中何日到 春來江上幾人還

（家は夢中に在って何れの日にか到たん

春は江上に来て幾人か還る）文1）中、pp.426

というように、『万葉集』と同様に、詩人が「家」から離れて遠く家人を偲ぶという傾向で、「家」が人、特に

家族にかかわる感情を直接的に伝える対象となっている。また、

有弟皆分散 無家問死生

（弟有るも皆分散し 家の死生を問う無し）文2）、pp.179

処世既孤特 傳家無承襲

（世に処して既に孤特なるに

家を伝える承襲無し）文2）、pp.390

のように、家族や家系を意味する例がかなり見られる。

さらに、唐詩では次の例のように、「家」を思いながら、政治や人生などの思想表現につながる傾向もある。

思欲委符節 引竿自刺船 將家就魚麦 帰老江湖辺

（符節を委てて 竿を引きて自ら船に刺し

家を將いて魚麦に就き

江湖の辺りに帰老せんと思欲す）文3）、pp.66

注目すべき点は、一般名の「宮」は93例であるが、固有名で登場する「宮（固有）」は60例^{注20)}、「殿」36例、「禁、禁中」8例^{注21)}、「行宮」5例^{注22)}、「宮殿」「離宮」各4例、「宮閣」1例で、宮殿に関する語を合計すると211例と、一番多くなることである。この時代は中国古代王朝と建築の高潮期であり、このことは首都の

表1 唐詩における頻度の高い建築用語

建物	計	部屋	計	部位	計	部材・建具	計	家具・用具	計	庭	計	派生語	計	国	計	都市・村	計	外部施設	計	その他	計
家	167	堂	35	門	118	簾	24	笛	25	花	90	宿	49	漢	65	城	177	路	109	舟	65
樓	109	宴	18	壁	31	柱	12	琴	21	池、塘	55	居	32	國	41	郷	47	道	52	書	38
宮	93	房	13	窓、窗	25	帳	12	鍾	19	樹	43	樓	11	楚	25	長安	46	橋	22	車	33
閣	71	室	13	階	15	扉	12	杯	18	庭	35	住	10	吳	24	洛陽、洛	33	徑	10	船	22
臺	70	閭	9	戸	12	梁	9	枕	16	園	32	少府	5	秦	23	京	29	津、津渡	8	帆	17
宮(固有)	60	筵	6	屋	8	幕	6	胡笳	14	柳	26	荊門	4	洞庭	20	村	28	道路	8	輦	10
塞	59	歌舞	6	茅	8	欄、欄干	6	鏡	12	竹	23	辺庭	4	蜀	12	故	20	堤	7	樓船	4
閣	39	席	3	門(固有)	8	幔	4	牀	12	苑	23	劍閣	3	越	11	鼎	16	街	4	軒車	2
殿	36	座	3	軒	7	金茎	4	席	9	松	18	絶壁	3	蕃	8	故郷	15	巷	4	戎軒	2
亭	29	屋	3	牆	6	瓦	3	管	9	林	17	室	2	涼州	7	金陵	13	御溝	4	函書	2
寺	28	廚	2	簷	5	闌干	3	壺	8	草	15	壁	2	昆明	5	郭	12	逕	4	蓋	1
閣、宮閣	27	庁	1	閣道	5	棟	3	笙	6	桃	15	庭	2	周	5	郡	11	渡	3	玉乘	1
陵	26	寢房	1	垣	4	帷	2	箏	6	苔	14	天門	2	幽州	5	都	10	三条	2	車(金輅)	1
驛	23	寢斎	1	墻	4	紗	2	觴	5	蓮	14	雲門	1	樓蘭	4	市	8	紫陌	2	乘輿	1
宅	20			宮門	4	幄	2	榻	5	楊柳	11	雁門	1	日本	4	長沙	8	池	2	輿	1
宮	18			籬	3	檻	2	琵琶	5	葉	11	劍門	1	燕	3	揚州	8	阡	1	軾	1
府	17			昌閭	3	幌	1	屏風、屏障	5	井	10	權門	1	荊州	3	故国	5	狹斜	1	鑾輿	1
舍	16			竈	2	幕	1	床	4	泉	9	吳門	1	唐	3	邯鄲	5	驛路	1		
屋	15			戸	2	羅幃	1	樽	4	桂	8	臺郎	1	趙	3	邑	4	通柱	1		
廟	15			閭	2	薨	1	簫	4	梅	8	太室	1	魏	3	帝京	4	陌	1		
莊	15			梯	2	額	1	盤	4	李	7	清門	1	安西	2	武昌	4	市	1		
戸	12			基	2	軒	1	爐	3	院	5			伊州	2	漢陽	3	通	1		
戌	11			前除	1	茎	1	絃	3	芙蓉	5			雲南	2	国	3	津梁	1		
宿	9			廊	1	楹	1	筵	3	木	5			外国	2	郊	3	道逕	1		
別業	9			禁韋	1	盤	1	磬	3	黄葉	4			端州	2	柳州	3	壕	1		
館	8			陛	1	板	1	案	2	梧桐	4			州	2	襄陽	3				
禁、禁中	8			地	1	門扉	1	牀席	1	石	4			松滋	2	旧国	2				
園	7			牀	1	箔	1	化粧臺	1	落葉	4			荊	2	郷国	2				
草堂	7			夾城	1			座	1	槐	4			孫	2	威里	2				
廬、庵	7			臺城	1			壘	1	蒲	3			中原	2	田園	2				
瑤池	6			女牆	1			尊	1	杏	3			帝畿	2	北平	2				
祠	5			回磴	1			筵	1	菊	3			滄州	2	京洛	2				
城閣	5			層	1			簾	1	松柏	3			河陽	1	南京	2				
邸第、邸	5			角	1			棚	1	水	3			博浪沙	1	閭巷	1				
塔	5			複道	1			燈	1	柏	3			岳州	1	越中	1				
他	141							他	3	他	55			他	36	他	39				
合計	1198		114		289		118		237		592		137		337		573		251		202

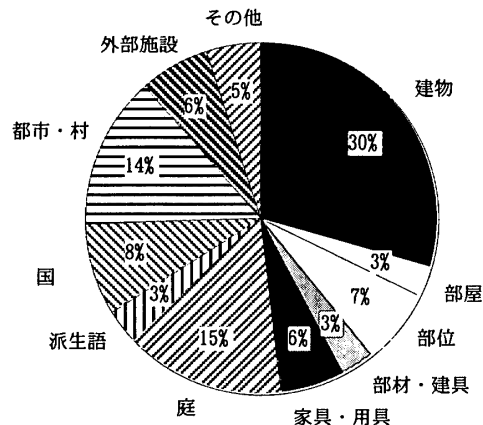


図1 唐詩における建築用語の分類別構成比

長安と東都の洛陽に、大量の宮殿、官庁、寺院が建てられた時代状況を反映している。それらの詩の内容は『万葉集』初期のように単純な宮廷賛歌だけではなく、中に住む人の心情を思ったり、宮女の不幸に対して同情したものなどがある。例としては、

九天昌閨開宮殿 萬国衣冠拜免旒
 (九天の昌閨 宮殿を開き
 万国の衣冠 免旒を拝す) 文1) 中、pp.328
 一枝濃艶露凝香 雲雨巫山枉斷腸
 借問漢宮誰得似 可憐飛燕倚新粧

表2 和歌における頻度の高い建築用語

分類	建物		部屋・部位		建具・家具		庭		派生語	
歌集	用語	度数	用語	度数	用語	度数	用語	度数	用語	度数
万葉集 4516首 858個	家	201	門	73	畳	8	庭	29	(大)宮人	28
	やど	119	垣	37	簾	6	園	21	住む	23
	宮	71	床	33			島(山斎)	2	宿る	20
	屋	40	戸	26					(大)宮所	10
	いほ	29	柱	8					家人	10
	殿	20	梁	1					舎人	3
	社	17	窓	1					宮仕へ	2
	室	6	いらか	1					宮女	1
	寺	4	屋根	1					宮道	1
	倉	2	階	1						
	塔	1	軒	1						
	城	1								
		511		183		14		52		98
古今集 1100首 113個	やど	36	垣	11			庭	5	住む	20
	宮	4	門	7			園	1	やどり	7
	いほ	3	床	7					家	4
	社	3	戸	1						
	屋	2	端	1						
やかた	1									
		49		27		0		6		31
新古今集 1979首 307個	やど	58	垣	22	鐘	7	庭	38	住む	35
	いほ	25	床	16	竈	4	園	2	宮	4
	屋	25	軒	15					やどる	3
	宮	10	戸	13					すまひ	2
	家	4	窓	4					すみか	1
	社	3	柱	3					家	1
	寺	2	門	3					門	1
	殿堂	1	ひさし	2						
		1	壁	1						
			瓦	1						
		129		80		11		40		47

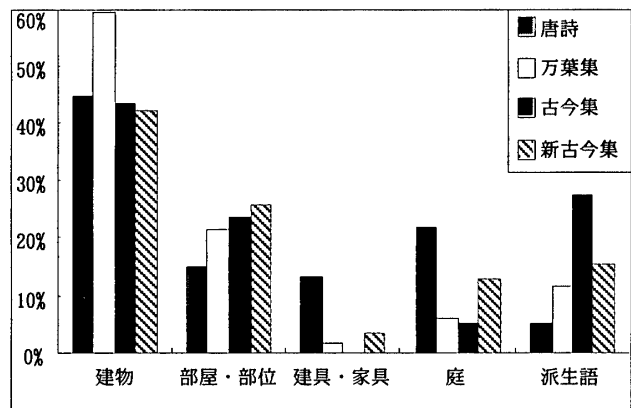


図2 建築用語の分類別構成比の比較

(一枝の濃艶 露 香を凝らす 雲雨巫山 枉げて断腸
 借問す 漢宮 誰か似たるを得ん
 可憐の飛燕 新粧に倚る) 文1) 下、pp.132

などである。また、

得相能開国 生児不象賢 凄凉蜀故妓 来舞魏宮前
 (相を得て能く国を開くも 児を生みて賢に象ず
 凄凉たり蜀の故妓 来たり舞う魏宮の前) 文3) 、pp.165

のように、政治的、社会的な意識を強く持ち、都市や建築の空間に、国家の疲弊を悲しむ政治思想的な感情を詠み込むところが和歌とは異なる点である。

唐詩には、「楼」「臺」が情感を展開する舞台としてよく登場する。楼台に登って遠く眺め、高い視野から感情的、思想的観念を展開する。例としては、

城上高楼接大荒 海天愁思正茫茫
 (城上の高楼 大荒に接す
 海天 愁思 正に茫茫たり) 文1) 中、pp.433
 花近高楼傷客心 萬方多難此登臨
 (花は高楼に近くして客心を傷ましめ
 萬方多難にして此に登臨す) 文1) 中、pp.401

などがある。また、

故人西辞黄鹤楼 烟花三月下楊州
 孤帆遠影碧空盡 唯見長江天際流
 (故人 西のかた黄鹤楼を辞し 烟花三月 楊州に下る
 孤帆の遠影 碧空に尽き
 唯だ見る 長江の天際に流るるを) 文1) 下、pp.141

と詠んでいるように、高樓の機能の一つは眺望であるが、高樓から眺めることで個人的な友情、愛情を自然空間へ移行させ、空間意識を広げる効果を演出している。

東林氣微白 寒鳥忽高翔 吾亦自茲去 北山帰草堂
 (東林 氣 微かに白く 寒鳥 忽ち高翔す
 吾も亦た茲より去り 北山 草堂に帰らん) 文1) 上、pp.58
 人日題詩寄草堂 遥憐故人思故郷
 柳條弄色不忍見 梅花満枝空断腸
 (人日 詩を題して草堂に寄す
 遥かに憐れむ 故人の故郷を思うを)

柳条は色を弄して見るに忍びず

梅花は枝に満ちて空しく断腸) 文1) 上、pp137

と詠んでいるように、「草堂」は素朴な空間であり、わび住まいの仮住居である。それは唐の詩人の遁世の空間であり、精神の安定を得る空間でもあり、和歌の「草庵」に対応すると思われる。

住居の表現は「宅」「屋」「荘」「別業」「邸第」「邸」「広廈」「廈」「第宅」「甲第」^{注23)}もよく見られるが、「宅」は、

寡妻無子息 破宅帯林泉

(寡妻 子息なく 破宅 林泉を帯ぶ) 文2)、pp312

などに見られるように庶民の素朴な住居として使われる。「荘」「別業」「邸」などは、

朱邸抗平臺 黃扉通戚里

(朱邸 平台と抗い 黄扉 戚里に通ず) 文1) 上、pp174

高官の邸宅として使われる。「屋」は、即物的な「家」を指す。

去年燕巢主人屋 今年花發路傍枝

(去年 燕は巣くう主人の屋

今年 花は発く路傍の枝) 文1) 上、pp42

また、材料を示す用語「茅」を伴って自分の家を「茅屋」「廬」と謙遜して称する傾向も見られる。これは和歌における「庵」(いは、いはり)「屋」に対応する。

終南有茅屋 前對終南山 終年無客長閑閑 終日無心長自閑

(終南 茅屋有り 前は終南山に對す

終年客無く長く閑を閑ぞし

終日心無くして長く自ずから閑なり) 文1) 上、pp150

閑所を指す「閑」と、とりでを指す「塞」は、政治に閑心を持っていた唐の詩人に、戦乱による愁いや離別や不満の感情を呼び起こさせるものであった。

玉関殊未入 少婦莫長嗟

(玉関 殊に未だ入らず

少婦 長嗟すること莫かれ) 文1) 中、pp59

勸君更尽一杯酒 西出陽關無故人

(君に勸む 更に尽くせ一杯の酒

西のかた陽關を出ずれば故人無からん) 文3)、pp337

この他、宮中の図書館である「蘭省」「翰林」「省中」「芸閣」「蘭台」「秘書」「秘省」や、「閣」「寺」「亭」「舍」「城楼」「城闕」「塔」「酒家」「驛」「関」などの用語も見られ、この時代の建築の多様性を示している。

5-2. [部屋] について

唐詩も和歌も内部空間を歌うことは少ないが、唐詩において「堂」は社会的な意味を持つ部屋で、住宅の主室あるいは接客、礼樂の場、もしくは役所の政務を行う場である。

少婦起聴夜啼鳥 知是官家有敕書

下牀心喜不重寐 未明上堂賀舅姑

(少婦 起きて聴く 夜啼の鳥 知る是れ官家に敕書有るを

牀を下り心に喜びて重ねて寐ねず

未だ明けざるに堂に登りて舅姑に賀す) 文2)、pp248

では身分の高い者へ朝礼を行う住宅の主室であり、

酒泉太守能劍舞 高堂置酒夜擊鼓

(酒泉の太守 能く劍舞す

高堂に置酒して夜鼓を撃つ) 文1) 下、pp200

では礼樂を行う場である。

君不見高堂明鏡悲白髮 朝如青絲暮成雪 人生得意須盡歡

(君見ずや 高堂 明鏡 白髮を悲しむを

朝は青糸の如く 暮れは雪を成す

人生の得意は須く歡を尽すべし) 文2)、pp137

と詠んでいるように、人生哲学を表明する場でもある。

5-3. [部位] について

[部位] の中では、「門」がほとんどである。しかしその用例を見ると、「門」は外部から見る建築の姿を指し、間接的にその内部の姿を指し、家系の意味も表現している。

朱門酒肉臭 路有凍死骨

(朱門 酒肉臭く 路には凍死の骨有り) 文2)、pp.170

我家公相家 劍佩嘗丁當 旧第開朱門 長安城中央

(我が家は公相の家 劍佩嘗に丁当たり

旧第朱門を開き 長安城の中央) 文2)、pp.340

「朱門」とは官邸の門のことで官吏の邸宅を意味するが、ここでは官吏の身分や、腐敗を表現している。

如今七貴方自尊 羨君不過七貴門

(如今 七貴方に自ら尊くす

羨む 君が七貴の門を過らざるを) 文1) 上、pp.155

ここでは家系を示している。

東風吹雨過青山 欲望千門草色閑

(東風 雨を吹いて青山を過ぐ

欲って千門を望めば草色閑なり) 文1) 中、pp.427

山河千里国 城闕九重門 不覩皇居壯 安知天子尊

(山河千里の国 城闕九重の門 皇居の壯を觀ずんば

安んぞ天子の尊きを知らんや) 文1) 上、pp.171

のように、唐詩における「門」はその内部を深く意味し、間接的に家・皇居・城のことを表現する傾向がある。『万葉集』でも外部から皇居の「門」と一般の家の「戸」を詠むが、内容は比較的単純に天皇の住居を讃え、あるいは人間の別離という素朴な情感を表すものが多い。

唐詩において、「壁」には寂しいイメージがあり、「窓・窗」には人の内面的な心情を外部へ展開していく表現が多い。具体例として、

深壁藏燈影 空窓出艾煙 已無鄉土夢 起塔寺門前

(深壁 灯影を藏し 空窓 艾煙を出だす

已に郷土の夢無く 塔を起つ 寺門の前) 文2)、pp.369

は離別の寂しい心情を詠んでおり、

畫壁餘鴻雁 紗窗宿斗牛 更疑天路近 夢與白雲遊

(画壁 鴻雁余り 紗窗 斗牛宿れり

更に疑う 天路の近きかと 夢に白雲と遊ぶ) 文1) 中、pp.54

は脱俗の人生観を求めている。

5-4. [部材・建具] [家具・用具] [庭] について

唐詩の中の「簾」「帳」は、和歌に現われる花鳥風月の美学とは異なって、感情的で身近な空間として女性の「宮怨」「恋い」などの繊細な情感をよく伝えている。

可憐楼上月徘徊 應照離人粧鏡臺

玉戸簾中卷不去 擣衣砧上拂還來

(憐れむ可し楼上 月徘徊し

応に照らすべし 離人の粧鏡台

玉戸 簾中 卷けども去らず

擣衣の砧上 払えども還た来る) 文1) 上、pp.165

金井梧桐秋葉黃 珠簾不捲夜來霜

熏籠玉枕無顏色 臥聽南宮清漏長

(金井の梧桐 秋葉黄なり 珠簾捲かず 夜来の霜

熏籠 玉枕 顏色無し

臥して聴く 南宮の清漏長きを) 文2) 、pp.114

「笛」「琴」「箏」の出現する唐の詩作には、戦乱への愁い、離別による孤独の詩情が読みとれ、これには、

誰家玉笛暗飛聲 散入春風滿洛城

此夜曲中聞折柳 何人不起故園情

(誰が家の玉笛ぞ 暗に声を飛ばす

散じて春風に入って洛城に満つ

此の夜 曲中 折柳を聞く

何人か故園の情を起さざらん) 文1) 下、pp.152

などの例がある。

「庭」はかなり多く、その構成物である「花」「樹」「柳」「竹」「松」「林」「草」「苔」「蓮」など自然植物を詠むものがほとんどであり、「池・塘」^{注24)}「庭」「園」「苑」なども多く見られる。

八月蝴蝶來 雙飛西園草 感此傷妾心 坐愁紅顏老

(八月 蝴蝶来たり 双飛す 西園の草

此に感じて妾の心を傷ましめ

坐ろに紅顔の老ゆるを愁う) 文2) 、pp.139

苑外江頭坐不歸 水晶宮殿轉霏微

桃花細逐楊花落 黃鳥時兼白鳥飛

(苑外の江頭 坐して帰らず 水晶の宮殿 転た霏微

桃花は細かに楊花を逐うて落ち

黄鳥は時に白鳥を兼ねて飛ぶ) 文1) 中、pp.394

故園楊柳今搖落 何得愁中卻盡生

(故園の楊柳 今揺落す

何ぞ愁中に卻って尽く生ずるを得し) 文1) 中、pp.411

と詠んでいるように、「園」「苑」は大きな空間をもつ貴族の庭園と皇居の御苑として、家族の愛情や政治への憂愁の表現とともに使われている。さらに、「園」は「故」を伴い、「故園」で故郷の庭園・家のことを示

し、ほとんど望郷の表現であるのに対し、「庭」では小さな空間を意味し、懐古、旅愁、人生哲学の表現とともによく使われている。例として、

庭樹不知人去盡 春來還發旧時花

(庭樹は知らず 人の去り尽くすを

春來還た発く 旧時の花) 文1) 下、pp.203

朝來入庭樹 孤客最先聞

(朝來庭樹に入るを 孤客最も先んじて聞く) 文1) 下、pp.103

などの詩がある。また、「曲江」「南苑」「芙蓉」「樂遊園」「梨園」など長安の名高い御苑もよく見られ、唐の時代の繁栄した経済のもとで、御苑と別荘をかねた高官の莊園が数多く造られた背景が現れている。

5-5. [派生語] について

唐詩において「派生語」は和歌と比べて出現例が少ない。唐詩の「宿」「棲」^{注25)}と和歌の「やどる」の主語には光と動物がよく出現し、擬人法の技巧が使われているが、唐詩の場合は鳥がよく出現する。また内容的には、「宿」を含む詩には旅のことが多く、遁世、旅愁、不安の情感と結び付いて人の旅を鳥の行動に例えて詠まれることが多い。

茅亭宿花影 藥院滋苔紋

(茅亭 花影を宿し 藥院 苔紋を滋らす) 文2) 、pp.117

合昏尚知時 鴛鴦不独宿 但見新人笑 那聞旧人哭

(合昏すら尚お時を知り 鴛鴦は独宿せず

但見る新人の笑うを 那ぞ聞かん旧人の哭するを) 文3) 、pp.44

中庭地白樹棲鴉 冷露無聲濕桂花

今夜月明人盡望 不知秋思在誰家

(中庭 地白うして樹に鴉棲み 冷露声無く桂花を湿す

今夜月明 人尽く望むも

知らず 秋思 誰が家にか在る) 文1) 下、pp.275

また、唐詩の中の「居」の用例はほとんど「幽居」「深居」「閑居」「隱居」「寓居」^{注26)}となつて、これらの語を含む詩は厭世、遁世などと結び付いて詠まれている。

5-6. [国] [都市・村] [外部施設] について

唐詩において[国][都市・村]は、風光地・辺地・帝都・故郷を表していることがほとんどで、都市と町を意味する「城」が圧倒的に多い。これは唐の詩人が漫遊癖をもって旅をしながら、望郷、憂国憂民の歌を詠んだことによる。「長安」「洛陽」「京」「都」「帝京」など帝都を意味する言葉は多く、唐の帝都の風景を詠みながら、離別の憂愁、自分の抱負、人生を詠み込んでいるものが多い。これは政治への参加と官仕えへの望みを強く抱いていた唐の詩人の心の表れともいえよう。同時に、ふるさとを意味する「郷」「村」「故郷」も多く登場する。

長安大道連狹斜 青牛白馬七香車

玉輦縱横過主第 金鞍絡繹向侯家

(長安の大道 狭斜に連なる 青牛 白馬 七香車
玉璽縦横 主第を過ぎり 金鞍絡繹 侯家に向う) 文1) 上、pp.64
北亡山上列墳塋 萬古千秋對洛城
城中日夕歌鍾起 山上惟聞松柏聲

(北亡山上 墳塋 列なり 萬古千秋 洛城に對す
城中日夕 歌鍾起るも

山上 惟だ松柏の声を聞くのみ) 文1) 下、pp.126

〔外部施設〕は「路」「道」「径」がほとんどを占めている。これらは様々な種類の即物的な道路で、都、家族、友人を偲ぶ心情につながり、旅の道、故郷への道、政治への道、人生の道として現れている。

池開天漢分黃道 龍向天門入紫微

(池は天漢を開いて黃道を分ち

竜は天門に向かって紫微に入る) 文1) 中、pp.288

十上恥還家 徘徊守歸路

(十上 家に還るを恥じ 徘徊 歸路を守る) 文2) 、pp.66

5-7. [その他] について

「舟」「船」「帆」「樓船」の船を意味する言葉が多く見られる。唐の詩人は、船の中で自然を眺めながら、様々な詩情を展開し、人生を船に例えることが多い。

親朋無一字 老病有孤舟

(親朋 一字無く 老病 孤舟有り) 文1) 中、pp.132

客路青山外 行舟綠水前 潮平兩岸闊 風正一帆懸

(客路 青山の外 行舟 綠水の前

潮は平らかにして兩岸闊く

風は正しくして一帆懸かる) 文1) 中、pp.134

6. 結論

(1) 唐詩には、「家」「宮」「樓」「臺」「門」「関」「寺」「廟」「堂」「庭」「城」などといった多様な建築用語が登場する。和歌に比べて語彙が豊富で、唐の時代の都市的繁栄と建築の多様性及びそれに対応する用語の多様性を示している。

(2) 唐詩と『万葉集』に共通する傾向として次のことがいえる。建物全体を表現する語彙が比較的が多く、外部空間の優位がうかがえる。もっとも多く登場する「家」は、人間生活の根拠となる空間であり、家族・家系・人を意味し、家人にかかわる情感を伝える空間として使われる。また「宮」の表現が多いことも、唐詩と『万葉集』に共通する点である。

「やど」は、唐詩にはほとんど登場せず、日本の国風文化としての『古今和歌集』『新古今和歌集』において、「やまとごころ」を表現する居住空間として一般化されたこと^{注27)}に符合する。

(3) 『万葉集』では、皇族は「門」、庶民は「戸」によって、住居を具体的な映像として表現するのに対し、唐詩では「門」は、その中にいる人物を意味する傾向が顕著である。

(4) 和歌においては平城京、平安京の都市的な景観を詠む歌はほとんど登場しない^{注28)}が、唐詩には「長安」の景観が数多く登場する。その一方で、「故郷」という言葉も多く登場し、唐の時代の青年は繁栄する帝都長安を目指して、大いなる青雲の志を抱きつつ、故郷を離れたが、同時に故郷への想いも強かったことを表している。

(5) 唐の詩人にとって「路」は私情から公情までにつながる空間として、「城」とともに、和歌には見られない外部的、都市的な空間意識を示している。

(6) 和歌では「車」という動的空間を多く詠むのに対し、唐の詩人は「舟」という自然の水に近い空間において、自由で動的な景観を詠む傾向がある。

(7) 全体の情感表現を比較すると、和歌では、家族の愛情、離別の悲哀、忍ぶ恋など、人間同士の情愛もしくは、「あはれ」という美学に収斂するものであったのに対して、唐詩では空間意識がその人間感情だけでなく、政治、人生、哲学などの思想表現につながる傾向が顕著に見られる。

・謝辞・

本研究の遂行に当たり、本学の卒業生藤原隆、佐藤幸恵、在学院生中川景子、三氏のご協力を頂いています。ここに謝意を表します。

・注・

- 1) 文学の中に登場する建築や都市に関する研究することの意義については、これまでも既発表論文で述べている。参考文献11～14を参照。
- 2) 小川環樹は「唐詩への入門書としてつくられた選集は、むかしから少なくないが、日本で広くおこなわれたのは、何と言っても『唐詩選』にまず指を屈する。」と述べている。前野直彬は「この本におさめられた唐詩の一面は、その最も重要な一面である。この本は唐詩すべての傑作を網羅したものではない。だがそれを承知の上で読むならば、唐詩、ひいては中国の詩への入門書の役割を、この本は十分にはたしてくれるであろう。」と述べている(参考文献1を参照)。吉川幸次郎も『唐詩選』について、「江戸の世のベスト・セラーズとなり、和歌の『百人一首』とあいならぶ地位を占めた・・・」と述べている(参考文献2を参照)。
- 3) 参考文献1のpp.10-11を参照。
- 4) 李攀龍の『唐詩選』は好みの偏向をもち、中晩唐の詩作を無視したことはよく指摘されている。参考文献1と2においても、同じ指摘を述べている。
- 5) 「李攀龍の枠を破ろうとしての小さなこころみであった。ここに提供する『唐詩選』も、同じ努力の範囲をひろめる。かくてその内容は、旧『唐詩選』と、全然別である。」と吉川幸次郎は参考文献2において述べている。
- 6) 参考文献3において、「唐詩三百首」の意義を十分に述べている。
- 7) 角川書店の『唐詩三百首』のテキストとしては、陳婉俊『唐詩三百首補注』(1885年)を断句排印した『唐詩三百首』(中華書局、1959年)を用いた(参考文献3を参照)。

- 8) この本の詩の選び方においても、「李攀龍の編とされる『唐詩選』に収録されている詩はとらない」という編集方針で、唐詩の諸相を全体的に反映しようとしている（参考文献3を参照）。
- 9) 岩波書店の『唐詩選』465首、筑摩書房の『唐詩選』444首、角川書店の『唐詩三百首』93首を合わせ、その中から重複を避けた合計882首の詩作を本研究の分析対象とする。
- 10) 参考文献11と12を参照。
- 11) 木村徳国氏による「記・紀・万葉世界における建築の研究」に属するもので、日本建築学会論文報告集において発表されている（参考文献16と17を参照）。
- 12) 木村徳国氏はイヘ非建造物説について、参考文献18のpp.152において、「上代語イヘは、住居のための建築的なものではあったが、建造物を限定的に指示はしていなかった。むしろ、建造物をふくめて、家族があつまり住まうところの建築的なすまい全体を指示していた。」と述べている。
- 13) 参考文献19に詳しい。
- 14) 小野恭平氏の研究は、日本建築学会論文報告集において、参考文献20～22が発表されている。
- 15) 中小路駿逸氏は参考文献23において、古代文学の中で建築イメージが希薄なことを指摘している。
- 16) 参考文献11～14を参照。
- 17) ここでは、空間の見地から、部材と建具、家具と用具をそれぞれ同一のカテゴリーとして扱う。
- 18) 唐の時代は中国古代の建築が最も発達した時期である。この時代の都市・建築としては、隋の時代（581-618年）に造られた大興城（582年）と洛陽（605年）がそれぞれ発展し、首都長安（大興城）と東都洛陽として中国文化の中心となった。政治の中心であるこの二つの都市の他にも多くの都市が経済的に発展し、宮殿、官庁、寺院、楼が数多く建てられた。仏教の発展に伴い、仏教の寺、塔、石窟の建造も最盛期となり、また唐の皇室が道教を唱道したため、各地に大量の道教寺院（道観）が、また経済の発展により、様々な階級の多様な邸宅、別荘および庭園が建造された。
- 19) 図2は、既に発表されている和歌に関する研究と比較するため、唐詩における【建物】から【派生語】までの建築用語を対象とし、【部屋】と【部位】、【部材・建具】と【家具・用具】をそれぞれ【部屋・部位】、【建具・家具】としている。
- 20) 唐詩において宮殿を固有名で表す語は、「蓬萊」10例、「紫微」7例、「長信」6例、「新豊」「曲江」「興慶」各4例、「建章」「昭陽」「長樂」各3例、「望春」「長門」「長楊」各2例、ほかには「桐柏」「姑蘇」「紫宸」「上蘭觀」「南内」「芙蓉」「文昌」「宸居」各1例と全60例で非常に多い。
- 21) 「禁」「禁中」は「宮中」の意味である。
- 22) 「行宮」は天子が行幸したときに泊まる宮殿である。
- 23) 「別業」は別荘のことである。「広廈」「厦」は大きい家、「邸第」「第宅」は邸宅、「甲第」は立派な邸宅のことである。
- 24) 「塘」は池の意味である。
- 25) この「宿」と「棲」はそれぞれ動詞の「宿る」と「棲む」のこと。
- 26) これらの用語は俗世間を避けて物静かな所に暮らすことを意味する。
- 27) 参考文献15のpp.112を参照する。
- 28) 『万葉集』の中に、「あをによし奈良のみやこは 咲く花のにはうがごとく今盛なり」（小野老朝臣 巻3・3 28）などの歌があるが、これは景観ではなく、太宰府から平城京への憧憬を詠んでいる。

・参考文献・

- 1) 前野直彬 注解：唐詩選、全3巻、岩波書店、1961.5.5
- 2) 吉川幸次郎ほか1名 編：唐詩選、筑摩書房、1973.10.20
- 3) 深澤一幸 注解：鑑賞中国の古典19・唐詩三百首、角川書店、1989.7.31
- 4) 青木生子ほか4名 校注：新潮日本古典集成・万葉集、全5巻、新潮社、1984.9.10
- 5) 高木市之助ほか3名 校注：日本古典文学大系4・万葉集、全4巻、岩波書店、1957.5.6
- 6) 土屋文明：万葉集私注、全10巻、筑摩書店、1976.3
- 7) 奥村恒哉 校注：新潮日本古典集成・古今和歌集、新潮社、1978.7.10
- 8) 久保田淳 校注：新潮日本古典集成・新古今和歌集、全2巻、新潮社、1979.3.10
- 9) 佐伯梅友 校注：日本古典文学大系8・古今和歌集、岩波書店、1958.3.5
- 10) 久松潜一 校注：日本古典文学大系28・新古今和歌集、岩波書店、1958.2.5
- 11) 若山滋ほか1名：『万葉集』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.388、pp.116-123、1988.6
- 12) 若山滋ほか1名：『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.405、pp.141-147、1989.11
- 13) 若山滋：『源氏物語』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.408、pp.93-99、1990.2
- 14) 若山滋：『枕草子』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.411、pp.89-95、1990.5
- 15) 若山滋：文学の中の都市と建築、丸善ライブラリー、1991.4.20
- 16) 木村徳国：七・八世紀におけるタクトノ・タカヤの建築的イメージ、日本建築学会論文報告集、No.242、1976.4
- 17) 木村徳国：七・八世紀におけるイホ・カリホ・イホリの建築的イメージ、日本建築学会論文報告集、No.248、pp.115-125、1976.10
- 18) 木村徳国：上代語にもとづく日本建築史の研究、中央公論美術出版、1988.2.25
- 19) 池浩三：源氏物語◇その住まいの世界、中部建築ジャーナル、1987.5～1987.11（中央公論美術出版からも出版）
- 20) 小野恭平：中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について、日本建築学会論文報告集、No.393、1988.11
- 21) 小野恭平：中古の文学作品からみた山里の興味について、日本建築学会論文報告集、No.404、1989.10
- 22) 小野恭平：中世初期の仏教説話にみる仏教修行者の庵、日本建築学会論文報告集、No.463、1992.6
- 23) 中小路駿逸：日本文学の構図◇和歌と海と宮殿と、桜楓社、1983.6.10
- 24) 池田朋子他1名：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集、No.450、pp.121-130、1993.8
- 25) 中国社会科学院文学研究所古代文学室唐詩選注小組：唐詩選注、全2冊、北京出版社、1978.6
- 26) 張伝璽：中国古代史綱、全2冊、北京大学出版社、1989.7
- 27) 周勳初：唐詩大辭典、江蘇古籍出版社、1990.11
- 28) 劉敦貞：中国古代建築史、中国建築工業出版社、1984.6

（1995年1月10日原稿受理、1995年8月3日採用決定）